

現代日本のスポーツ空間における女性像の社会的認識変遷の一考察 ～「Sports Graphic Number」を例に～

スポーツ科学研究領域
5008A011-2 枝元一将

研究指導教員：リー・トンプソン

【研究目的】

世界においても、日本においても女性のスポーツ実践が活発になって久しい。しかし、そもそも近代スポーツにおいて女性は、そこへ介入できない様な存在として扱われていた。そこには、種々の理由があるが、それは近代スポーツが発明されたヨーロッパだけではなく、日本においても女性は当初スポーツ空間には存在し得ないものとして認識されていた。江刺の調査によると、戦前、1920年代の日本社会の「女性スポーツ観」というのは、女性達のスポーツ実践において大きく不利なものとなっていた様だ。(江刺、1992)当時、女性達がスポーツを実践する上で最も障害となっていた要素は「世間の偏見」だったそうである。「女性スポーツ観」が社会にそのように認識されていた時代から80年以上の月日を経て、日本における「女性スポーツ観」も世界の潮流に漏れず、大きく転換したと言えるだろう。

それでは、現代の日本において、その「女性スポーツ観」は具体的にどのように変遷していったのだろうか。本論では文藝春秋から発行されているスポーツ総合誌「Sports Graphic Number」(以下、Number)を対象として、その中で表象されている女性の変遷を辿っていく事とする。したがって、1つの研究対象である事、商業メディアを対象として扱う事に起因する様々な限界が生じる。しかし、日本の「女性スポーツ観」を部分的にではあるが投影していると考えられるNumberにおける女性の表象の変遷を辿る事で、これまで漠然と語られてきた「スポーツ空間に存在する女性の存在様式の社会的認識」(＝「女性スポーツ観」)の変遷の概観を浮き彫りにする事、それを本論の目的とする。

【研究課題】

分析方法としては1980年から2008年の28年間に発行されたNumber全718冊の中において女性アスリートだけでなく、女性そのものが扱われている記事を全てある基準において分類した。なぜなら、記事の数量的な分類をすることによって、各分類記事の時代的な変遷を明確な数字として明らかにする事ができるからである。そして、この分類された記事の統計の変遷を追う事で、Number誌面上に表れた「女性スポーツ観」の変遷を見る事ができると考えた。記事分類の定義については本論の中で説明しているが、ここでは「男性目線記事」を軸として論を展開していく。なぜなら、この記事が有無及び質が創刊期と現在のNumberを見るに当たって最も違う点であり、変化を読み易いと考えたためである。主に、女性記事の数的分類を資料として考察を行うが、補助的に具体的な記事例を示し質的分析も行った。なぜなら、記事内容に記事数の変遷だけでは明らかにできない女性表象の具体的な変遷を見てとることができたからである。

【結果】

28年間における女性記事の数的分類を行った結果、Numberにおける女性像の変遷は以下の3つの時代区分ができる事が明らかとなった。

「スポーツをする、もしくはしていた女性」を対象とした記事内において他の時代に比べ相対的に男性目線記事が多い時期(1980年～1984年)

全ての女性記事から男性目線記事が消滅を始める時期(1985年～1994年)

全ての女性記事から「スポーツをしていない女性」を対象とした記事が消滅を始める時期

(1995 年～2008 年)

本論では、この 3 つの時代区分ごとの数的・質的分析を男性目線記事を 1 つの争点として行った。その結果、第 1 期においては、記事の対象となっている女性達がスポーツを実践する者かそうでないかに関わらず、男性目線のバイアスのかかった記事が多数見受けられた。しかも、その内容も他の時期に比べると、男性目線の“濃度”はかなり高く、女性の身体(バスト、ウェスト、ヒップなど)に関する言及や、アスリートの 3 サイズ、また女性のセックスとスポーツとの関連に関する記事までもが掲載されていた。これらから、この時期にはスポーツと関わりのある女性を男性目線で認識することは比較的、自然なものであったということが考えられる。

第 2 期においては、数的・質的にも女性記事から男性目線が消滅を始めている事がわかった。男性目線記事数自体が第 1 期と比較すると激減している他、その記事内容も以前の様に女性の身体に関する言及はほぼ完全に消滅し、女性の顔を中心とする容姿の端麗さに関する言及が多くみられるようになっていった。この第 2 期の数的・質的特徴は、男性目線記事がかなり多いと言える第 1 期と逆にそれらがほぼ皆無に等しい第 3 期の間の過渡期的特性をよく象徴していると言えよう。この結果から、この第 2 期では既にスポーツと女性に関わる事は男性と同様自然な事と捉えられていた傾向があったと考えられるが、それ発展途上であり、彼女達を男性目線で認識する風潮は未だに存在していたと考えることができる。

続く第 3 期においては、「スポーツをしない女性」の記事おろか、女性記事から男性目線がほぼ消滅し、ごくわずかな男性目線記事の中身を見ても、第 2 期にも増して男性目線の濃度は薄いものになっていた。これには様々な理由が考えられようが、この時期に日本人女性トップアスリートが世界で活躍し始める事によって、Number 誌面上でも彼女達を優先的に扱わざるを得ず、結果的にメディアバリューが相対的に低いそれ以外の

女性達と、時代の風潮にも合わない男性目線の記事は誌面から追い出される結果になったと考えられた。

【まとめ】

以上の様な、Number における女性像の表象の変遷が全て現実の投影などとは毛頭言えない。しかし、見てきた様なスポーツ空間に存在する女性に対する認識が時代ごとに一定量の支配性を持っていた事は間違いない。

今回、筆者が対象とした Number では 1990 年代に入って既に男性目線が介入した女性の記事というのはほぼ消えていた。しかし、スポーツ新聞はおろか、雑誌やテレビでさえ、まだ女性競技者を男性目線で表象しているメディアは少なくない。

また、近年、自らがその女性性を PR 戦略として前面に押し出すという新たな女性アスリートも台頭してきている。彼女達と本論で取り上げたような男性目線で扱われていた女性達は自ら望んで男性目線で見られるというスタンスと、あくまでメディアが勝手に男性目線で描いたという部分で大きな違いはあろう。しかし、それらを包括的に対象とすることによって、初めて 1 つのメディア研究という枠組みから、「女性スポーツ観」の研究と言えるのではないだろうか。それを以降の課題としたい。「専門家による社会的現実の構築」(サルダー、2002)という逃れられない宿命を背負っているメディア上の表象を負う本論の様な研究は、その性質上、永久に完遂するという事はないだろう。「女性スポーツ観」という実態の見えない事象の変遷を辿る事は大きな困難を伴うが、以降の研究に本論が参考となる事を願ってやまない。